

終章 これからの歩み

昭和四十九年（一九七四年）の秋、藤原は熊本市内にある琵琶崎待労病院を訪ねた。目的は現存するカトリックのらい院を紹介するための記事取材であった。その訪問記の一部を、「ある群像」第二五号から紹介しよう。

I 信仰というものは自発的なもので、神様と自分のあいだのことだからな。

藤原 信仰の外への働きかけはどうでしょう。院長先生にうかがったら、飢饉や災害の募金に、みなさん、関心がおありとのことでした。

I それほどでもないけど、書きだして呼びかければ、みんな気持よく出します。

K 信仰によるものでもありますが、また最近は何となくお小遣いが豊かになったからだとも思いませんね。

I いくら何でもできるようになったのですから、もっと外で起きることに対して関心をもたなければいけ

ないと思うんです。そうすることによって、社会の人たちとつながりを、すくなくとも気持のうえで持てると思うからです。

K つまり、断たれた関係を回復しようという、わたしたちの気持でしょうか。

この会話を読むと、われわれがかつて彼らを捨て去り、彼らの存在を忘れようとしたにもかかわらず、忘れられた人たちは、断たれた交わりを彼らの側から回復しようとしていることが分かる。これは逆であり、われわれの方こそ、進んで手を差しのべなければならぬことなのだ。

今日、日本のらい療養者は、経済的な日常を営む上では、安定を得たといえる。だが、もしその安定というものが、偏見と差別に押しつぶされた彼らに与えられた代償であると考える人がいるとすれば、それは明らかに誤りである。困ることは安定という状態そのものである。「らい予防法」という桎梏につながれていながら、大方の人たちは、自らを「自由」へと解放する意識を鈍らせ、対等な人間関係を回復するための気力をも、そがれているからである。松本馨（国立療養所多磨全生園自治会代表）は、「自由か奴隷か」と題して「多磨」第五七巻第九号で次のように述べている。

（前略） 現行のらい予防法改正を患者の人権を侵害する違憲として、世論を起す最良の道は、回復者なるが故に住宅や職場を追われ、診療を拒否された者が、国と診療を拒否した責任者を人権侵害とし、告発し、法廷闘争に持ち込むことである。そしてそれを全患協が支援することであろう。こうした社会復帰者が多く出ることが望ましい。この問題は日本だけでなく、国際的反響を呼ぶことは必至である。戦後三十年を経た今日も尚、ハンセン氏病に対する差別と抑圧が行われていることは驚異だからである。しかし、長期療養者が現状に満足し、その変更を恐れているのと同じように社会復帰者もまた社会を恐れ、闘う勇氣が欠除している

ように思われる。だが、どのような状況下に在っても、真理を覆いかくすことはできない。いつの日にか現行のらい予防法が、患者の人権を侵害している違憲であるという刻印を押される日がくるであろう。そしてそれは、第三者によってではなく、われわれの力で成し遂げなければならない。それが患者運動の終極の目標だからである。この目標を見失うとき、患者運動は崩壊するか、利己的集団に転落していくであろう。

(後略)

今や老化の波は、らい療養所という社会にも押し寄せている。そこは、若い人がいて年寄りがいるといった一般社会とは質的に異なる。極端に言えば、らいの後遺症をもったうえに、無気力な人たちがばかりの集団となってしまう。社会が連帯の責めを問われないうちに、日本のらいを病む人たちは、その生を終えてしまうかもしれない。そうあつてはならない、そうさせてはいけない。好善社は「共に生きるために」十字架の蔭に身をひそませながらも、その一事を追い求めている。

昭和五十二年（一九七七年）十一月十九日午後一時、好善社は東京都港区のホテル高輪で創立一〇〇周年記念感謝会（二時間）を催した（口絵④）。集まった人はおよそ一三〇名、そのうちの四割が二、三十代のキャンパーであったことと、二割が療養者と回復者であったことは、記録しておきたい。挨拶に立った理事長は冒頭に、「北海道から沖縄にわたる日本全国各地よりご臨席下さいまして衷心より厚くお礼を申し上げます。特に、今も療養所で生活を余儀なくさせられているかたがたが、積極的に隔ての中垣を乗り越えて、今この席に共に在ること、ひとしお感動を覚えるものとございます」と述べている。

—— 一部 礼 拝 ——

司式 棟居 勇

前奏 バッハ作曲 コラール変奏曲 (Sei gegrüßet, Jesu künig)

讚美歌 五二〇

主の祈り

聖書 ヨハネの黙示録第二章一―四

祈禱

説教 「涙をぬぐい給う主」

祈禱

頌栄 五四一

祝禱

後奏

―― 二部 挨拶と祝辞 ――

挨拶

祝辞

祝辞

祝辞

祝辞

奏楽 横田 和子

理事 北林巳之助

理事 関根文之助

理事 小澤 貞雄

司会 理事 長尾 文雄

理事長 藤原 偉作

東京神学大学学長 竹森満佐一

日本聖公会 後藤 真

東京教区主教 白柳 誠一

日本カトリック教会 東京大司教区大司教 大西基四夫

国立療養所 多磨全生園園長

祝 辞

国立療養所多磨
全生園自治会会長

松本 馨

祝 辞

女子学院院長

大島 孝一

祝電披露

—— 三部 講 演 ——

講 演 『明治プロテスタントの階層』

国際基督教大学教授
文学博士

海老澤有道

閉会の辞

プログラムのように、まず礼拝を捧げた後、来賓から祝辞と励ましの言葉がおくられた。その要旨を次にあげてみる。

竹森満佐一

一〇〇年前の日本の状況を想像するとき、好善社の発足は信仰による奇跡というほかない。その後、多くの困難を乗り越えて今日に至ったが、これから当面する問題は著しく変わってゆくであろうし、消長もやむを得ない。しかし、目的としているところは伝道で、それは人間の計画ではなく、神のご計画によるのであるから、安心してお任せしているがよい。そのような姿勢があるなら、あらゆる局面に正しい対応ができるであろう。

後藤 真

「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である」とあるように、好善社が一〇〇年のあいだ続いたことは、神のみ心になんて守り育ててくださった結果である。それゆえ、今日の感謝会は、ただ神に栄光を帰するということに大切な意味がある。

今や世界の人々は、科学の発展、技術の進歩に反して孤独を味わっている。その中で好善社は、人間の尊さを教え、孤独を癒すものがキリストの福音であることを指し示している。そればかりではなく、一全国友誼カトリック教会代表者会議」の開催のきっかけを作り、その推進を果たされたように、エキキュメンカルな運動にとどまらず、カトリック教会の一致のためにまで労して下さっていることに敬意を表したい。

大西基四夫

らいという病いによって傷つけられた人の心をもとにもどすことは、いかにむずかしいことであったか。キリストの癒しはそこにあつたと思うが、病める人々のために祈りつつ歩んでくれたのが好善社であった。いき、もみじが日々美しく真赤になつて完成されてゆく様子を見るにつけ、太陽が、空気が必要だと知らされる。現在の療養者八〇〇〇名のうち六五〇〇名は治つている人たちだが、とざされた社会にいるために、なお癒されない多くのものをもっているし、社会には後遺症という重荷を背負つて働いている人が二五〇〇名もいる。それらの人たちが立派にもみじになれるよう、更に祈りつつ歩んで欲しい。

松本 馨

私はハンセン病患者を代表してお礼を申しあげたい。好善社と私たちとの関わりができたのは、明治二十七年に慰養園が設立されたときからだ。当時、日本には五万ないし七万の患者がいた。ある者は家の奥深くに隠れて死を待ち、ある者は故郷を追われ、乞食をしながら当てもなく地をさまよつていた。収容力は一〇〇人に達しなかつたと思うが、患者に大きな期待と希望を与えてくれた。好善社の最大の事業はこれらの患者にキリストの福音を伝えたことだと信じる。

大島孝一

私どもの女子学院と好善社と、歴史的に深い関係があるばかりでなく、一〇〇年の経過の中で驚くほどの共通の問題があることを発見する。らいは遺伝でなく、普通の病気で治るということ、他方では女子も男子と同様に勉学する権利をもっていることが明らかになった。一〇〇年の啓蒙の結果、だれも納得する常識になったのである。しかし、これらの常識は建前にすぎず、らいの場合も女子教育の場合も、変わることはない偏見にとざされているのである。

この夏、松丘保養園で行なわれたワークキャンプに参加して、わずかな経験であったが自分の問題を教えられた。これまで知っていると想っていたこと、見えると言いつ張っていたところに罪があるというのである。好善社がこの課題に使命が与えられているように、私たちも教育の場において特に問題としてゆきたい。

こうして好善社は二世紀の第一歩を踏み出した。はたして、どのような出合いがあるのだろうか。それは分からない。ただ、はっきりしていることは、この群れの人たちの心に次の聖句が強くひびいていることである。

信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。

(ヘブル二一・八)